

学位論文審査の結果の要旨

二ノ宮リム さち

本研究は、高等教育機関における持続可能な開発のための教育（ESD）について、国際環境人材育成事業の批判的検討を通じて可能性と課題を明らかにし、提言を示したものである。

第一に、広範な先行研究の検討にもとづき整理した ESD に求められる特性や、全学的波及・継続の必要性という観点から、文部科学省「戦略的環境リーダー育成拠点形成事業」を検討し、大学院の ESD 進展の鍵として「関係者の理解共有」「既存学位課程の変革」「『地域』の多様性と関連性への認識」「分野と国境を越えた学びあいの促進」を示した。

第二に、「現場『のための』教育」としての「現場体験」という概念を提案し、学習者への聞取から「『現場』を『持続可能な社会へ向けて行動する場』ととらえる視点」「学習者による学習の意味の理解と主体的な参画」「様々な感覚を通じた発見」「体験する『現場』と自身の『現場』の相違性・共通性・関連性への着目」といった対策を提案した。

第三に、「教育・学習を学生と現場の『文脈』に位置づける」ことに着目し、「現場の文脈の中でこそ豊かに実現する学習があり、その中には『ローカルな知』への気づきの意識化と共有が重要なこと」「科学知にもとづく専門教育と『ローカルな知』にもとづく現場体験を融合する必要があること」「将来の仕事の現場に学習を位置付けていく中でも『ローカルな知』に配慮する必要があること」「働く現場を『持続可能性へ向けて』働く現場ととらえる視点が重要なこと」「修了後の継続教育・学習が必要なこと」「教育者にも新たな役割が求められること」を論じた。

最後に、高等教育、特に大学院における ESD の実質的な進展へ向けて、従来の組織・研究・教育を見直し、現実社会や学習者の文脈に根ざす「現場のための教育」としての現場体験を専門教育と融合させつつ、「学ぶこと」と「生きること」をつなげる教育を実現することの重要性を確認し、今後求められる研究の視点を提示した。

以上のように、本論文は、多くの新しい知見を有すること、論文の内容、構成および公表論文数などから、本学位論文審査委員会は、全員一致して、本論文が博士（農学）の学位論文として十分価値があるものと判断し、合格と判定した。